

スポーツジャッジメントにおけるテクノロジーの導入

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1200537 山下 達央

第1章 はじめに

1-1 導入

競技スポーツにおいて試合中の誤審やミスジャッジというのは予測不能で切り離せない要素である。近年、そういった誤審が試合を左右し、時に厳しい批判を受ける。こうした状況からスポーツ界は審判の補助目的のためテクノロジーを導入して誤審という瑕疵的要素を排除する方向性に舵を切っている。ジャッジミスを含め抑え競技性を高めようとするのは理解に難しくなく否定することもない。しかし、それらを完全に切り除くことはスポーツの本質と適合しているのだろうか。スポーツのエートス(スポーツの内在的目的)は「勝敗の決着による強さの決定」であり、勝利を追及することが競技者の在り方であるとされている(川谷、2012)。これにおいて誤審というものは勝敗を正しく決定しない要因であり非難されるべきものだとされる。これは「実力では勝っていたのに…」という負け惜しみのような感想が正当化されてしまうからである。

しかし、スポーツの目的は勝敗のみであろうか。スポーツは、勝利と強さの同一化(勝者=強者)をテロスとするが、強さは完全に勝利に同一化・還元されることはない(川谷、2012)。弱小チームが強豪チームに勝利する、いわゆる番狂わせを起こしたとしても、前者が後者より強いという方程式にはならない。しかし、私たちはこういう現象をしばしば見ることができる。これをスポーツの革命性と呼んでいる(川谷、2012)。こういう側面もまたスポーツの醍醐味ではないのだろうか。更に、勝利が強さと同一化されない要素、そ

の残余は誤審の可能性から生じるものであるという主張もある(柏原、2016)。もし、それらが同一化されてしまうならば、スポーツは勝敗の決定にすぎないたんなるゲームへと頽廃してしまうことになり、そのエートスは形骸化してしまう(川谷、2012)。

もちろん誤審だけではなく、その日の天候や湿度、プレイヤーの状態、例えば主力選手の怪我、トーナメントであればくじ運等も勝敗に影響する。真に平等に行える試合などあり得なければ、1試合とて同じゲームも存在しない。坂本(2019)は、テクノロジーにとって偶然性とは存在してはならない対象であると述べている。それら偶然的要素が失われてしまえば試合をする前から勝敗は既に決定してしまう。すなわちそこには、単純に「強さ」を誇るチームや選手が順当に勝利を収めるお約束的な催しとしてのスポーツが存在することになる。

1-2 研究テーマと目的

本研究では、競技スポーツのジャッジメントにおけるテクノロジーの導入の是非をテーマに設定し、テクノロジーを導入の結果として競技スポーツにおける「おもしろさ」の喪失が内在している可能性を探るとともに、「機械」ではなく「人間」が裁くからこそ生み出すことのできる価値を明示する。また、その過程を通して、テクノロジーを用いた判定の現代的意義や課題を明らかにする。本研究の検証結果は、今後のテクノロジー導入の加速化が予想されるスポーツ界に警鐘を鳴らすとともに再考を促すものである。

なお、筆者の立場としてテクノロジー化の必要

性を完全に認めていない訳ではない。明らかな大誤審は正当に事後修正されるべきである。ただ、そういった誤審からでも生まれる物語があることを提示し、「人間」が作り出すその魅力を否定できないのもまた事実である。

第2章 背景と歴史

2-1 テクノロジー導入の経緯

いくつかのスポーツでは、テクノロジーの導入を決断させたいわゆる「世紀の大誤審」と言われる試合が存在する。ここで、2つほど例を挙げてみる。第1は、1969年(昭44)春場所2日目の横綱大鵬-戸田の一戦である。行事軍配差し違えて戸田の勝利になり、横綱の連勝が「45」で止まることとなった(日刊スポーツ、2019)。この一件により相撲界では他のスポーツより40年も早くビデオ判定を導入することとなった(舞の海秀、2017)。歴史的な競技であるのにも関わらず現代的なシステムを採用しているという、ある意味不思議な感覚に捉われる。第2は、2000年のシドニー五輪柔道男子100kg超級決勝戦である。フランスのダビド・デュイエに対し技をかけるが、これが審判によりデュイエのポイントと判定されそのまま敗北を喫してしまう。この一戦もまた、ビデオ判定やジャッジ制度が導入されたきっかけとなった(週刊現代、2016)。

どちらの試合もオリンピックという大舞台や記録の懸かった試合で審判によって結果が左右されてしまった事例である。現代では、テレビ中継によってリプレイを見ることができ、人々は様々なプレー場面を振り返ることが可能となった(柏原、2018)。また、SNSの発達により審判の一挙手一投足が人々に評価されるようになった。このように1つ1つのプレイに対する判定がより明確に可視化され、審判は常に世間に晒されていると言える。別段注目度の高くない試合であっても判定

ミスをすればSNSなどを通じて槍玉に挙げられてしまい、したがって審判は応援する者や視聴者によって裁かれるといった現状にある。このような状況もまた、スポーツ界にテクノロジーの導入を後押ししたかもしれない。スポーツ界は文明の機器を伴って正確な判定を求める現代社会の要請に応えようとしている。

2-2 サッカーとVAR

近年、テクノロジー化を推し進めており世界各国で試験的導入が開始されている競技としてサッカーが挙げられる。ここではその経緯を歴史的に掘り下げてみる。

サッカーにテクノロジーを持ち込もうと取り組んだのはオランダサッカー協会(KNVB)であった。彼らは、テクノロジーの使用は審判の質が向上し、審判の決定が一般的に受け入れられるとしREFEREEING2.0という計画を掲げ審判をサポートできる範囲について現在進行で継続的な研究を行っている。2012年には、国際サッカー連盟(FIFA)はゴールラインテクノロジー導入をし、KNVBはさまざまな角度からマルチカメラ映像を再生するホークアイシステムを採択した(KNVB, 2019)。そして、2014年にKNVBは非公式に国際サッカー評議会(IFAB)に対してビデオ判定の導入を請願し、2016年3月にIFABの会議でビデオ・アシスタント・レフェリー(VAR)の科学的検証のため2年間の試験の開始が決定された。欧州の2017-18シーズンでは、イタリアのセリエAやドイツのブンデスリーガ等で試験的導入がなされた。その後、日本が躍進したことで記憶に新しい2018年FIFAワールドカップロシア大会は、VARが最初に使用された大会としても注目を集めた(Joan Medeiros、2018)。また、日本でも2018年から推し進めてきたVAR導入に向けた取り組みを以って2020年よりJ1リーグ全306試合を含む321試合で採用することが既に決定している(Jリーグ、2019)。

VARは審判の負担を軽減すべくテクノロジーを用いて補助するシステムであるが、大枠としての原則や目的が明確に存在する。そもそもVARは100%、完全に正確であることを目的としていない。すなわち、ほぼノンストップで行われるアクションや試合における長時間の中断がないことから作り出される重要な流れや興奮を台無しにしてしまうことを望んで導入されたものではない。設定者側(IFAB)は、“minimum interface - maximum benefit”(最小の干渉で最大の利益)という指針を示している。更に、「審判の判断は正しかったのか」ではなく「明らかに間違った決定を犯してはいないか」という観点から意思決定を下すことを原則としている(IFAB、2019)。

さらに、介入できる場面は以下の場合の意思決定に限られている。

- ・得点したか
- ・ペナルティキックであったか
- ・退場であったか
- ・重大な間違いを犯していなかったか

以上の特定の事象のみVARを適用できる(日本サッカー協会、2019)。

もちろんビデオ判定を採用した効果はあり、サッカー界に新たなステージをもたらすこととなった。先述した2018年ワールドカップでは、VARのレビューにより判定が覆ったインシデントが14件あり、64試合制となった1998年以降のワールドカップで最多のペナルティキックの判定がなされた(安倍、2018)。これは、今まで見逃されたプレーがビデオ判定によって浮き彫りとなったことを意味する。一方で、問題点も少なくともVARに関する批判は頻繁に耳にする。例えば、ビデオの使用時の中断もそうだが、審判に観点を当ててみると本来持ち合わせている直観的な意思決定プロセスを損なってしまう恐れがある。自分の判断はさておいてテクノロジーに頼ってしまえばよいと

いう考えに至るかもしれない。(Job Fransen、2018)。また、そもそも最終的な判断をするのは主審であるため恣意的なジャッジやバイアスに依った決断を下す可能性が否定できないことも挙げられる(Kiiky Tutor、2019)。

現状、賛否両論が混在しているビデオ判定であるが、テクノロジーの発達やその技術の使用を求める社会的要請を背景に、注目度の高い試合を契機として導入に至ったと考えられる。

第3章 研究課題と検証方法

3-1 仮説

これまでの議論から以下の命題として研究課題を提示する。

「“人間”が行う誤審を含むジャッジメントは競技スポーツにおけるドラマ性を提供しているのではないか。」

スポーツのおもしろさは、あらかじめ設えられた予定調和的なストーリーを、予想外のドラマが破壊することにある(川谷、2005)。そうであるならば、誤審が契機となって試合のストーリーにドラマが生まれることもある。それによりチームや個人が逆境を跳ね返す名試合を見ることができ、あるいは、誤審による一連の騒動に垣間見える人となりを目撃することもできる。このようなドラマ性を感じられることもスポーツの魅力のひとつではないだろうか。

3-2 検証方法

本研究では、競技スポーツにおいて人間による判断であるからこそ生まれる価値を説明するためケーススタディを通じて、説明的分析を行う。誤審がドラマをもたらした事例をケースとして抽出し、新聞記事や雑誌等の文書や試合記録や映像を利用してそのドラマ性を説明すべく分析した。

第4章 ケーススタディ

本研究では、審判の存在が大きく影響を与えた事例を3つ取り上げた。順にその試合概要と生まれたドラマを説明する。

① サッカー

2019年5月17日、J1リーグ第12節浦和レッズ(以下、浦和)vs湘南ベルマーレ(以下、湘南)が前者のホーム開催の中行われた。当該試合を簡略化することが非常に難しいくらい情報量の多いゲームであった。前半から2失点を喫した湘南が反撃を試みた最中に事件は起きた。確かにゴールネットを揺らした湘南のシュートがゴールではないと判定されたのである。さらにそのままプレイは続行され、湘南はあわや失点するところであった。当然のように湘南の選手やスタッフたちは猛抗議する。浦和の選手もどこか困惑の表情となり、スタジアムは異様な雰囲気包まれた。しかし、ジャッジは変わらず前半は2-0で浦和のリードで終了した。ハーフタイムコメントを異例の白紙で提出した湘南の曹貴裁監督は選手たちにこう問いかけたという。

「後半、出ない、ピッチに立つことが出来ないと言うなら出ないでいいよ。監督をクビになっても、怒られても、出なくていいよ」

これに対してチーム最年長の梅崎司選手は、

「今、負けた状態で何言っても仕方がない。必ず逆転してから考えよう」

と発言し、チームメイトもそれに同調した。

最悪の判定に加えて0-2のビハインドといった、絶望的な状況に諦めず逆転を目指す湘南の精神力は並外れたものであったとされ、気持ちを1つに迎えた後半から奇跡的な展開を迎えることになる。全精力を注いだ湘南は2点差を追いついたのである。そして同点のまま迎えた後半ロスタイムに劇的な瞬間が訪れる。山根視来選手がドリブルで持ち上がり放ったシュートはネットを揺らした。そのまま終了し結果2-3という湘南の大逆

転劇であった。選手もスタッフもピッチになだれ込み感情を爆発させていた。サポーターには涙が光る者もいた。試合後の選手コメントで選手たちは、判定については納得はしていないが諦めずに逆転を目指そうと口を揃えて答えていた。また、試合終了後、SNS上ではこの試合の話題で持ち切りであった。審判を誹謗中傷するもの、判定について批判するもの、湘南を称えるものや試合内容に感動したものなど様々であった。

また、この試合に反応する現役のプロサッカー選手が続出し判定の改善を求めている。本来は得点を認められるはずがそうならなかったのは由々しき問題でありビデオ判定を求める声も妥当である。「選手も人生を懸けているのだから」であるとか「可哀想である」とかいう意見も多くみられた。また、この試合を担当した山本雄大主審のインタビューでは、誤審後、経験したことのない雰囲気を感じ、後半はレフェリー生命最後の試合になると腹を括って臨んだという。家族やサッカー協会はもちろん、選手やサポーターの皆に支えられ復帰することができたが、そこに至るまでの苦しみは計り知ることができない。復帰を遂げた山本主審は、「今の自分の目標はまずVARが1回も入らないパーフェクトなゲームをやりたいと思っている」と語っている。このように審判にも物語をもたらした試合であった。ビデオを見る限り、明らかな誤審であったが、このように多くのドラマが生まれ、様々な感情を生み出したのは事実である。誤審という要素があったからこそ、私たちは湘南を自然と応援し、逆転を収めた時には感動させられた。誤審が皮肉にも湘南の強さを引き出しその存在を知らしめたとも言えるのではないだろうか。そんな中で曹監督は試合後のコメントでこのような言葉を残している。

「これから世の中AI化が進んで、サッカー界にもテクノロジーが多く入ってくる時代になる。そ

ういう中でも人間がいることの喜びとか、人間がいることで上にいく、という風にしなければいけないと思っている」

このようにこの試合は、多くのドラマや人間模様を生み出したが、誤審という要素がそれを大きくしたと考えることもできる。

② テニス

2018年現地時間8月8日全米オープンの決勝戦が行われ、大坂なおみ選手(以下、大坂)がセリーナ・ウィリアムズ選手(以下、セリーナ)を6-2、6-4のストレートで破り日本人初となる四大大会制覇を成し遂げた。大坂は憧れである元世界ランキング1位のセリーナ相手に、攻勢をかけ番狂わせを演じた。スコアだけを見れば大坂の完勝とも思えるが、この試合もまた複雑なドラマを生み出した。

この試合では、セリーナと主審を務めたカルロス・ラモス審判員との間で衝突が繰り返され、観客もその判定に不満を覚えていた。第1セットを先取されたセリーナは続く第2セット目の第2ゲームに客席にいたセリーナのコーチの動きがこの大会では違反行為となるコーチングとみなされ主審から最初の警告を受ける。第5ゲームでは、セリーナが怒りを露わにしてラケットを叩きつけ破壊し2度目の警告を受けた。その後も頻りに主審へ抗議を続け、第8ゲームでは暴言で3度目の警告とともにペナルティを取られゲームを落とした。セリーナも主審に対して自身の誠実さと不公平さを訴えるとともに「嘘つき」や「盗人」と貶めた。この悶着は過熱して最後には主審の対応が男女差別か否かという問題(男子の方が主審に対し酷い対応をしていると主張した)に発展した。この行為に対しセリーナに1万7000ドル(約189万円)の罰金が科された。

一方、大坂はこの度の騒動の中、強靱なメンタルを発揮して優勝してみせた。しかし、アメリカ

のスター選手の出産後初の優勝の瞬間を心待ちにしていた会場は不満を露わにした。表彰式では、前代未聞の観客によるブーイングが鳴り続く異様な雰囲気の中で行われ、大坂はバイザーを下げ思わず泣いてしまい、セリーナがブーイングを止めようと促す一幕もあった。その後の大坂のスピーチはこうであった。

「みんながセリーナを応援していたのを知っている。こんな終わり方でごめんなさい」
大坂は勝者であるのに関わらず謝罪するという選択を取ったのである。私たちは、彼女の堂々たるプレイだけでなくその純真な性格を感じる事ができたであろう。また、会場から批判を浴びたラモス主審は、独特な空気の中で毅然な対応を貫いていると感じられた。セリーナ擁護の記事もあった一方で、彼は厳格だがどのような選手に対してもフェアであると評価も受けていた。

今回の騒動の反響は大きく決勝の全米放送で大会史上2位の高視聴率を誇ったが、このような多くのドラマが生まれる決勝戦になると誰が予想したであろうか。大坂が元世界女王を撃破する展開でも十分ドラマ性に富んでいるが、それに加えてセリーナが主審と対立し冷静さを欠く自滅的展開から最終的には性差別の論争に発展したのである。この事例から、対話できる主審という人間の存在が複雑怪奇で予想外のドラマを生み出す可能性があることが示唆される。

③ 野球

2006年に開催された第1回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)といえば、日本が優勝した大会として記憶に残っている人も多いかもしれない。そんな日本の躍進の過程において多くのドラマが生まれた。その背景には誤審と1人の名物審判も存在した。

その誤審による事件が起きたのは2次リーグの日本vsアメリカ戦であった。3-3で迎えた8回

日本は1死満塁と勝ち越しのチャンスを得た。岩村憲明選手が浅い左飛を放ち、3塁走者の西岡剛選手がタッチアップを試みて見事に生還した。しかし、タッチアップ時の離塁が早いというアメリカ側の要請も1度は却下されたのだが、抗議を受けたボブ・デービッドソン球審(以下、デービッドソン)が判定を覆したのである。映像で見ると限り得点は認められて然るべきであった。王貞治監督の懸命な対応も実ることなく判定は変わらない、その結果、侍ジャパンは9回に1点取られ金星を取り逃したのである。多くの米メディアは明らかに誤審であると指摘していた。その後、日本はメキシコに勝利するが韓国には敗れてしまい2次リーグ敗退の危機に瀕していた。しかし、ドラマは悲劇的なままでは終わらなかった。2次リーグ最後の試合となったアメリカ vs メキシコの試合が行われた。メキシコ代表は既に敗退が決定しており、日本が準決勝に進出するにはアメリカが2失点以上で負けることであった。一縷の望みに賭ける日本であったが、試合の球審は「世紀の大誤審」を下したあのデービッドソンであった。彼はその日もまた本塁打をフェンス直撃と判定するなどアメリカに有利に裁いたのだ。しかし、この判定にメキシコは粘り強く対抗し、2-1で勝利を収めた。想定外の奇跡が起こり、日本は準決勝に進むことになり、2度敗れた因縁の相手韓国と相対できた。その後の準決勝と決勝でもデービッドソンは塁審を務めていたがここでは特異な判定はなく日本は優勝を達成した。

このデービッドソンという男は私たち日本人にとって因縁のある相手であると同時に強烈な印象を抱かせた。そもそもデービッドソンのジャッジの評価は芳しくなく、この第1回大会時はマイナーリーグの審判であった。2017年に引退した彼について当時3塁コーチを務めていた現西武ライオンズの辻発彦監督は、「きっと死ぬまで忘れない

名前。顔も浮かんでくる」と苦笑した。彼の中で世紀の大誤審は苦い記憶である一方で教訓として心に留めているのであろう。私たちは、王ジャパンが優勝したこともあり良い記憶として残っている。それは当然のことであるが、その盛り上がりにはデービッドソンも一役買ったに違いない。誤審の翌日、ワイドショーでも取り上げられ国民の関心をより高めたのは事実である。彼の判定が私たちにさまざまなドラマを与えてくれた。このような名物審判の存在やその判定があって生まれる魅力があることを忘れてはいけない。

第5章 まとめ

5-1 考察

本研究では、人間による審判の存在によってドラマが生み出されることを明らかにすることを目的とした。具体的には、先述した3つのケーススタディを以って審判の判定によってドラマが創出されたことを示した。誤審や審判の存在は競技スポーツにおいて偶然性をもたらし、その強さの決定に余剰的価値を付加する。「人間」であるからその決定に各々の意思が介在し、「人間」であるから対話が生まれる。そのため、スポーツに想像を超えたドラマが生まれるのである。これは私たちがスポーツを魅力に感じる1つの要因であると考えられる。

5-2 これからの課題

また、今後このまま機械化が進むのであれば競技スポーツはどうなってしまうのだろうか。将来は機械による無人の判定を行っているかもしれない。そうなれば誤審という存在は“正しく”排除されて、ケーススタディのようなドラマ性を有する展開は喪失してしまう可能性がある。

ただ、どのような競技スポーツにおいても最終的な判断は人間が行っているのが現状である。そもそも完全に機械化するのは困難であるかもしれ

ない。例えば、フィギュアスポーツ等の芸術性を競うスポーツであれば、どのようにして芸術点を判定するのだろうか。ラグビー等のコンタクトスポーツであればどのように反則を定義するのだろうか。また、サッカーについても全部の競技場にVARを設置することができるのか疑問が生じる。その年間コストは約1億円かかる見込みであり(日刊スポーツ、2017)、その費用は決して小さくはない。安易に導入できる代物ではないテクノロジーの導入には「人間」の判定が生む価値もあることを念頭に置き十分な検討をする必要がある。判定の完全性だけに重きを置きテクノロジー化に盲進するのは危険ではないだろうか。

第6章 参考文献

- ・川谷茂樹「スポーツ倫理学講義」ナカニシヤ出版、2005
- ・坂本拓弥「現代のスポーツにおけるテクノロジーと欲望の協奏/狂騒」『現代スポーツ評論』第41号、創文企画、2019年11月、90-98頁
- ・川谷茂樹「スポーツにおけるルールの根拠としてのエトスの探究」『体育・スポーツ哲学研究』26巻1号、2004年、1-11頁
- ・川谷茂樹「ゲームの同一性とその目的—「両立不可能性テーゼ」再考—」『体育・スポーツ哲学研究』35巻1号、2013年、31-43頁
- ・川谷茂樹「スポーツのエトス再考—「決定」について—」『Contemporary and Applied Philosophy』4、2012年、65-78頁
- ・柏原全孝「可能性としての誤審」『追手門学院大学社会学部紀要』第10号、2016年3月、1-16頁
- ・柏原全孝「スポーツとテクノロジー：ホークアイシステムの場合」『甲南女子大学研究紀要、人間科学編』第54号、2018年、2月、145-154頁
- ・安部健太「VARの成果とインシデントの検討

2018 FIFA ワールドカップを手がかりとして」『人文』17号、2019年3月、247-256頁

- ・KNVB「Refereeing 2.0」2019年

(<https://www.knvb.com/themes/refereeing-2.0>
2019-11-25 情報取得)

- ・J. LEAGUE. JP「2020 シーズンビデオアシスタントレフェリー導入試合について」2019年9月24日

(<https://www.jleague.jp/release/post-60611/>
2020-1-4 情報取得)

- ・IFAB「132nd Annual Business Meeting」22 January、2018

(http://static3eb8.kxcdn.com/documents/639/165902_220118_IFAB_Media_Package_ABM2017_all_media_FINAL.pdf 2019-11-25 情報取得)

- ・日本サッカー協会「Laws of the Game2019/20」2019年
(http://www.jfa.jp/documents/pdf/soccer/laws_ofthegame_201920.pdf 2020-1-28 情報取得)

- ・日刊スポーツ「ビデオ判定導入50年 きっかけとなった一番とは」2019年5月19日
(<https://www.nikkansports.com/battle/column/su/mo/news/201905180000238.html> 2019-12-27 情報取得)

- ・舞の海秀平「他のスポーツより、40年も早く「ビデオ判定」を導入した大相撲」2017年7月28日

(<https://www.nikkansports.com/battle/column/su/mo/news/201905180000238.html> 2019-12-19)

- ・週刊現代「本人登場！ 篠原 vs ドゥイエ「世紀の大誤審」を語ろう」2016年9月3日

(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/49566>
2020-1-14 情報取得)

- ・João Medeiros「The inside story of how FIFA's controversial VAR system was born」23 June 2018

(<https://www.wired.co.uk/article/var-football-world-cup> 2019-11-16 情報取得)

・ Job Fransen 「How video assistant referees could undermine on-field referees at the FIFA World Cup」 July 10, 2018

(<https://theconversation.com/how-video-assistant-referees-could-undermine-on-field-referees-at-the-fifa-world-cup-98466> 2019-12-28 情報取得)

・ Kiiky Tutor 「The Pros and Cons of VAR in the Football Match decision」 August 18, 2019

(<https://kiiky.com/pros-and-cons-of-var-in-football/> 2019-12-28 情報取得)

・ 湘南ベルマーレ公式サイト 「J1 リーグ第 12 節 浦和 vs 湘南 試合後監督・選手コメント」 2019 年

(<http://www.bellmare.co.jp/217402> 2020-1-30 情報取得)

・ Number Web 「チョウ監督と被るクロップの姿。大誤審があっても湘南が勝てた理由。」 2019 年 5 月 20 日

(<https://number.bunshun.jp/articles/-/839372?page=2> 2020-1-30 情報取得)

・ SoccerDigest Web 『<2019 ベストヒット！> 「J リーグ史上最悪」世紀の“大誤審”に批判殺到。現役選手も「こういうの減らそうよ」と苦言 | J リーグ編』 2019 年 12 月 29 日

(<https://www.soccerdigestweb.com/news/detail/id=68250> 2020-1-30 情報取得)

・ Number Web 「浦和 vs. 湘南、山根視来の劇的ゴール。あの時あの位置に CB がいた理由。」 2019 年 5 月 24 日

(<https://number.bunshun.jp/articles/-/839434> 2020-1-30 情報取得)

・ 森雅史 「主審人生はこれで終わった……レフ

ェリー山本雄大にはその後何が起きていたのか」 2020 年 2 月 5 日

(<https://www.targma.jp/jron/2020/02/05/post633/> 2020-2-6 情報取得)

・ BBC 「ウィリアムズ、全米 OP 決勝戦の暴言で罰金」 2018 年 9 月 10 日

(<https://www.bbc.com/japanese/45471276> 2020-2-1 情報取得)

・ 日刊スポーツ 「大坂なおみ日本初快挙、セリーナ破り全米制覇／詳細」 2018 年 9 月 9 日

(<https://www.nikkansports.com/sports/news/201809070000424.html> 2020-2-1 情報取得)

・ THE ANSWER 「大坂なおみ、“セリーナ劇場”の決勝視聴率は大会史上 2 位！「騒動で爆上げ」」 2018 年 9 月 13 日

(<https://the-ans.jp/news/36652/> 2020-2-1 情報取得)

・ BBC 「大坂なおみ、セリーナ破りテニス全米オープン初優勝」 2018 年 9 月 9 日

(<https://www.bbc.com/japanese/45463079> 2020-2-1 情報取得)

・ THE ANSWER 『セリーナ暴言、ラモス主審は「厳格だが公正」 関係者証言「選手を公平に扱っている」 2018 年 9 月 15 日』

(<https://the-ans.jp/news/36873/> 2020-2-1 情報取得)

・ 渡邊裕子 「全米二分！大坂なおみ・セリーナ決勝で噴出したコート上の差別の存在」 2018 年 9 月 16 日

(<https://www.businessinsider.jp/post-175189> 2020-2-1 情報取得)

・ 日刊スポーツ 「日本サヨナラ負け、米も認めた誤審」 2006 年 3 月 12 日

(<https://www.nikkansports.com/baseball/wbc/20060312/vtr/vtr05.html> 2020-2-2 情報取得)

・ 永瀬郷太郎 『WBC 日米戦、「世紀の大誤審」の審

判よさらば 引退のボブ・デービッドソンに表
する「敬意」』2017年3月7日

(<https://toyokeizai.net/articles//161522?page=2>

2020-2-2 情報取得)

・日刊スポーツ『西武辻監督「死ぬまで忘れな
い」デービッドソン主審』2017年2月23日

(<https://www.nikkansports.com/baseball/news/17>

[82726.html](https://www.nikkansports.com/baseball/news/1782726.html) 2020-2-2 情報取得)

・日刊スポーツ『導入すると年間コスト約1億
円／教えて「VAR」』2017年11月12日

([https://www.nikkansports.com/soccer/japan/new](https://www.nikkansports.com/soccer/japan/news/201711120000042.html)

[s/201711120000042.html](https://www.nikkansports.com/soccer/japan/news/201711120000042.html) 2020-2-3 情報取得)